体験版
純潔奉姫
—BRIDE SERVANT—
成人向け
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

純潔奉姫マイア

～あなたのザーメンでわたし、変身します！～

恵満

［絵］佐藤匠

この物語は成人向けです。
１８歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語によって生じる影響および
それらがもたらす結果については
執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。
また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり
犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではございません。

本書は電子書籍としての可読性を優先し、
印刷版とはレイアウトが異なります。
あらかじめご了承ください。

体験版目次

プロローグ
006

第１章
誕生！ 純白無敵の変身ヒロイン！
010

おまけ：Ｈシーンピックアップ
『Ｋカップ１１２ｃｍパイ圧奉仕』
052

登場人物紹介

◀神志摩（かみしま）マイア

天才的な頭脳を持つ日英ハーフの科学者。

質量転送理論を提唱した神志摩カズヤ博士の娘。

オタク気質の持ち主で、重度のファザコンである。

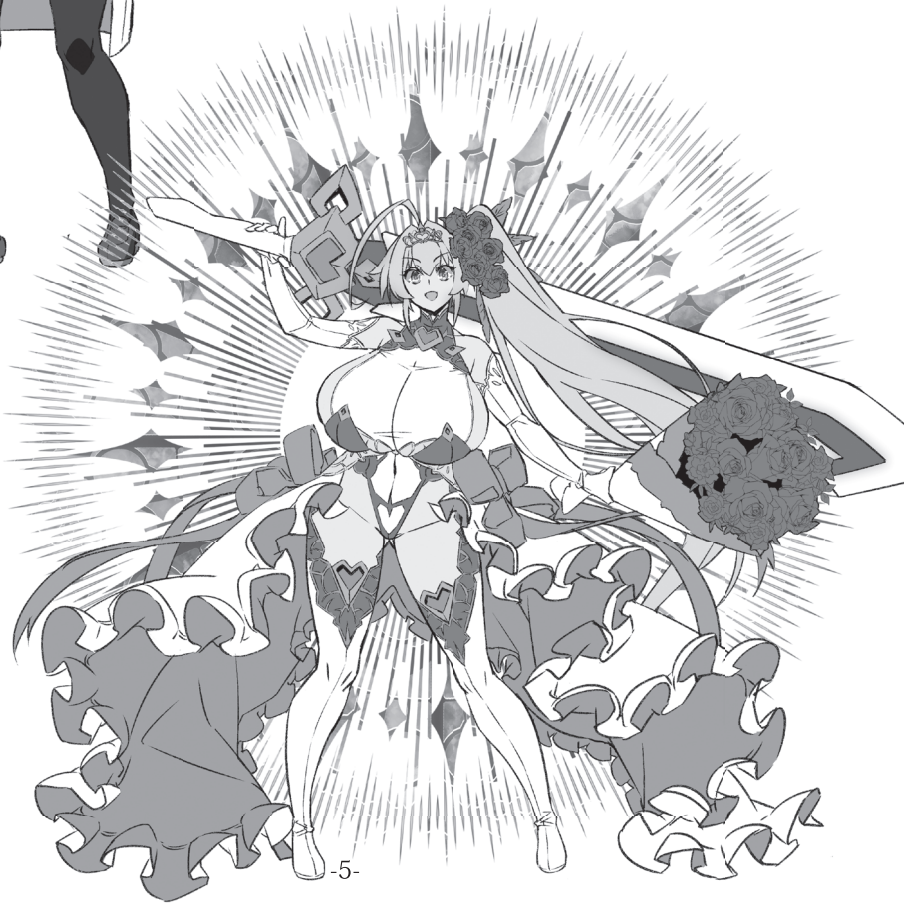
将来の夢は父と結婚すること。

▼ブライド・サーヴァント

質量転送装置（トランスファ）によりマイアが変身した姿。

最初はただのコスプレ衣装だったが、

偶然が重なりパワードスーツ化してしまう。



プロローグ

町外れにある教会で若い二人は生涯の誓いを立てた。
どれほど苦しくても愛し合い、互いを慈しむと。
その約束が破られるまで半日とかからなかったのは何とも皮肉なことだった。
「ひゃはははっ！　いいケツしてるじゃねぇか！」
「ひ、いぎぃ♡　おちんちん、ふ、太すぎるぅ♡」
「もっと腰を振れってんだよ！　そこでぶっ倒れてる新郎に見せつけてやるんだ！」
メチャクチャに荒らされた聖堂で白濁に染まったウェディングドレスの女が喘いでいる。たくし上げたスカートからは、むっちりとした太ももが露わになって、滴る愛液で表面がヌラヌラと輝いていた。
「い、ひぃッ♡　も、もうやめてぇ♡　わ、私は良一くんのお嫁さんなのにぃ……♡」
「うるせぇ！　穴がガバガバの濡れ濡れじゃねぇか！　良一くんとやらは満足させてくれたのか？　俺のとそいつのどっちがイイんだ？」
「い、イイッ♡　こっちぃ♡　奥まで届くのぉ♡」
花嫁は立ちバックで犯され、あまりの具合の良さに蕩けていた。招待された客の殆どは逃げ出していたが、若い女たちだけは捕らえられている。花嫁と同じように無理矢理、性交させられて

いた。
相手は人間の身体に獣の頭を持つ怪物たち――
馬に、羊に、猿に……実に多様なラインナップ。
彼らは見たまま獣人と呼ばれている。拳銃程度の火器は全く通じず、尋常でない膂力で暴れまわり、警官隊では手も足も出ない。その集団が結婚式場を襲い、惨劇が繰り広げられているのだ。
「ねぇ、リーダー。こんなことやっていて、あの女をホントにおびき出せるんですかい？」
「来なくたっていいじゃねぇか！　最高のお楽しみタイムだぜ？」
「それもそうで――」
下っ端の獣人が言いかけた刹那、天井近くのステンドグラスから差し込む光が粉々に砕け散った。
全員が一斉にそちらを振り向くと、破片に混じってフワリと開いた白い華が落ちてくる。それがスカートの裾だと気付いたときにはもう手遅れだった。
聖堂に着地したのは、蜂蜜色の金髪をサイドテールで結わえた少女である。大きな紅い瞳に強い意志を宿し、獣人たちを見据えた。
身に纏うのは豊満な身体のラインを強調する白基調のボディスーツ。そこにスカートやグローブ、ハイサイブーツ、差し色のピンクを組み合わせている。
花嫁衣装をモチーフにしたそのコスチュームは、この場にピッタリの筈なのにどこか的外れな印象を与えた。
「スイート・リッパー、オン!!」

少女の声が響く。すると、何もない空間に裂け目が生じ、黒い塵が集まって身の丈ほどの大剣が現れた。
太刀筋は閃光となって煌めき、近くにいた獣人たちが吹っ飛ばされる。
「で、出やがった!!　待っていたぞ、チンポしゃぶりのクソビッチが!!」
「なっ!?　まだそんなこと言ってるんですか!?」
リーダーの罵りに、少女はもろに反応して顔を赤らめている。
スキありと他の獣人たちが飛びかかるが少女の振り回した剣であっさりと撃退され、長椅子に頭から突っ込んで動かなくなる。
それも全部、犯されている女たちがいない方向を狙っていた。ダメージを負っているのは獣人たちだけである。
細腕から繰り出される剣戟を目の当たりにし、リーダーは顔を顰めた。
「ぐっ……　噂通りゴリラ並の腕力しやがって……」
「こほんっ……　暴れるのをやめて、その人達を離してください！」
「へっ！　嫌だね。せっかく、獣化の力を手に入れたんだ。でけぇことしねぇで何をするってんだい？」
「結婚式を襲うなんて最低です！　結婚式は夢！　女の子の憧れ！　それをこんな風に踏み躙って、絶対に許せません！」
声には一段と力が籠もっていた。
拳をワナワナと震わせ力説する少女に、獣人たちは嘲笑を浴びせる。

「関係ねぇ。俺たち《ゾアトロン》は革命を起こす！　腐れた権力をぶっ壊して、新たな秩序を作るのさ!!」
「幸せを手にした人たちを傷つけてイキがらないでください！」
「幸せだぁ？　幸せってのは、力を手に入れて、それを振るうことを言うのさ！　そこにぶっ倒れている新郎だって、力がありゃ花嫁の肉穴を差し出すこともなかったんだぜ！」
ゲラゲラと品のない笑い声に、女たちの嬌声が混ざり合う。
少女は目を伏せ、スーッと息を吸った。
強い眼力で敵を見据える姿は、麗しくも力強い。
「そんなのはテロリストの世迷い言です！　これ以上の悪事はさせません！」
「やってみやがれ!!　お前をとっ捕まえてヒィヒィ言わせてやるんだ。今日こそ覚悟しろ!!」
一斉に襲いかかる獣人ども。
分厚い肉質が迫る中、少女は落ち着いて大剣を構えて名乗りを上げた。
「清く輝く純白のブライド・サーヴァント!!　乱暴は絶対に許しません!!」

――これは純白の奉仕人を名乗る少女の戦いの物語――

第I章　誕生！純白無敵の変身ヒロイン！

#1

人里離れた山奥にある『質量転送技術研究所』では、人類の未来を変え得る大実験が行われようとしていた。

その実行者たる少女はセーラー服の上に白衣を重ね、己に気合を入れんと頬を張り、衝撃でずり落ちた眼鏡の位置を直して「よし」と独り頷く。メロンを2個詰め込んだみたいな胸元と健康的なぶっとい太もも、それに均整の取れた美しい顔貌（かおかたち）……　野暮ったく結えた黒髪と丸眼鏡に隠れがちだが、かなりの美少女である。

その名は神志摩（かみしま）マイア。若き天才として名を馳せている科学者だ。

「いよいよです」

実験室の広さは十分。ドーナツを内側から眺めたように空間を削っている。壁は丸く、緩やかな勾配が床から天井まで続いていた。その部屋の中心では柱の形をした巨大な機械が天井を支えている。

「解析に必要なデータは自動でロギングされますけど、それとは別に映像記録も欲しいですよね。というわけで、こんなこともあろうかと全く別系統の記憶装置も持ち込んであります！」

『ねぇ、マイア。アンタは正気なの？』

三脚を立て、ビデオカメラのセットを終えたマイアに向かって呆れた声がかけられる。
丸い天井を仰いで首を傾げ「いまさらですか？」と聞き返した。すると頭上のスピーカーからは特大の溜息が漏れる。
『自分を被験者に人体実験するなんてイカれてるわ。アタマおかしいんじゃない？』
「シュガーに言われたくありません。１０年もわたしのサポートＡＩをしているのに、わたしの行動が読めないわけじゃないでしょう」
『いつでもアンタは予想の斜め上を行くのよ。それにＡＩってのはね、たくさんの平凡から平均値を抽出したような存在なの』
「その割にはクチが悪いんですよねぇ……」
『うるさい。アンタみたいなマッドサイエンティストに合わせて最適化された結果なんだから、いちいち文句を言わないで』
「しくしく。狂っているなんてひどい……」
シュガーは苦楽を共にしたサポートＡＩだが、いかんせん態度が悪い。普通のユーザーなら不良返品していることだろう。ちなみに実体の専用ボディは持たず、オンラインのみに存在している。
『一般常識に照らし合わせて心配してやってんのよ。危なっかしいマイアの子守をするために、神志摩カズヤ博士があたしを作ったんだから』
「もう子供じゃありません。だから、お父さんの心配は杞憂です」
『アンタの父親、草葉の陰から泣いてるわよ』

「お父さんは死んでなんかいません。その認識は訂正すること」
『……そうね、行方不明ってだけね。でも一応、最後に警告。人体実験なんてバカな真似はやめなさい』
「シュガー、質量転送装置のブートをお願いします」
『はぁ……　いつものことだけど言っても無駄みたいね』
　中央の機械柱に無数の灯りが点き、羽虫に似た音を立てて演算が始まる。
　立ち位置を確認してからビデオカメラの録画開始ボタンを押す。そして胸元からストラップに通した指輪を取り出した。
　すーっと息を吸い、ただでさえ大きな胸をさらに膨らませる。
「えーっと、本日は4月11日」
『12日よ。日付ぐらい覚えておきなさい。研究以外はホント駄目なんだから……』
「訂正。4月12日です。記録者はわたし、神志摩マイア。これより質量転送装置の本稼働試験を行います。質量転送理論の提唱者は神志摩カズヤ。わたしの父です」
　ビデオカメラに向かって笑顔を作る。
　歴史的瞬間を記憶媒体に残すのだから後で見返した時、少しでもよく写りたいというわけだ。
「父の理論に寄れば、この世界は便宜上《向こう側》と呼ばれる異次元と接しています。わたしはそこに存在するマテリアルを編纂し、この世界へ導く技術を開発しました。これにより構成されたストラクチャはあらゆる形状を作り、望んだ特性を得ることが……」
『オタクって好きなこと喋るとき、メチャクチャ饒舌になるわよね』

「シュガー、いま良いところなんですよ！」
『あー、はいはい。黙ってますよ』
「こほん、それでは続きを」
ひとしきり理論的な部分を語り、いよいよ実験を開始する。
自信はあった。それだけの積み重ねをしてきた。しかし、人体に対して質量転送装置（トランスファ）を使うのはこれが初めてである。
緊張で息を呑んで目を瞑った。心臓が落ち着くまでの間、「お父さん、どうか力を」と祈る。
『やめておきなさい』
「最後の警告、２回目ですね」
『うっさい。万が一のことがあったらすぐに救急車でも警察でも何だって呼んでやるんだから、せいぜいダサい姿でも晒しなさいよ』
「ありがとう、シュガー」
ぎこちなくウィンクをしたマイアはストラップに通した指輪を天高く掲げた。そして、澄んだ声で起動コードを唱える。
「ディヴァイン・スパーク、イグニッション！」
音声認識により装置が起動し、マイアの身体に紫電が走る。
指輪を中心に光の粒が弾けると白衣と制服が瞬時に消失した。続けて靴、眼鏡、下着……と身に付けていたものがすべて無へと還る。ブラから解放され、ズシリと実った双丘が上下に揺れる。たっぷり肉を蓄えた尻も合わせて跳ね上がり、思わず手で押さえた。

しかし、もっと隠すべきは乳首と秘部だと気付く。慌てて対応するも股間はともかく、胸の肉が有り過ぎて腕から溢れてしまう。
（うぅっ……　ちょっと痩せたほうがいいでしょうか？）
グラビアアイドル顔負けのプロポーションは世辞にもスリムとは言い難い。おまけに身長は女性の平均以上に高かった。
瞬時に全裸となり、ヒヤッとした風が柔肌を撫でる。
急に冷静さを取り戻し、局部に手が触れたままでは転送が開始しないことを思い出した。恥じらいながらも両手脚を広げ、あらかじめ設定しておいたポーズを取る。
はるか遠く……物理的でも時間的でもない距離を隔てた《向こう側》で構築した衣装が、マイアの豊満な肉体を包む。最初は闇が染み出してきたみたいに黒く染まり、シルエットが形作られていく。
（あれ……？）
急に視界が暗く閉ざされる。見回すと周囲は黒い地面。見上げると黒い塵が降っていた。
こんなプロセスは組み込んだ覚えはない。
（この景色、どこかで……）
予期せぬトラブルかと焦っていると、闇の中で大きな光の輪が見えた。その輪は複雑に分割されていて、青から紫そして赤へとグラデーションがかかっている。
（教会の……ステンドグラス？）
視界はすぐに元に戻り、灰色の研究室が目に映る。

漆黒のシルエットが砕け、マイアの周りにフワリと純白のスカートが花咲く。同時に結えていた髪が解けて黄金色に染まる。甘く清涼な風が吹き、透き通ったヴェールをミステリアスに靡かせた。

「計算通りです！」

『はぁ、ホントにうまくとはねぇ……』

「成功！　成功ですよ、シュガー！」

『喜ぶのは構わないけど、その格好なんなの？　ウェディングドレスにしちゃ珍妙よね』

「知らないんですか⁉　花嫁魔法使いセレナを⁉」

『あー、あんたの部屋にポスター貼ってあるアニメね。さっきの起動コードもそのアニメのセリフなの？　ちょっと違う気がしたけど』

「原作版です！　アニメ版とは結構違うんですよ」

『うわぁ、どーでもいい情報』

「ＡＩにあるまじき反応ですね。わたしが毎週のように解説してあげたじゃないですか」

『オタクの話なんて聞き流されるモンなのよ』

「ひどい⁉」

質量転送装置（トランスファ）の稼働実験は成功し、《向こう側》から召喚されたマテリアルはマイアの設計通りに機能した。

無数の糸が編まれ、白く染まってウェディングドレスによく似たアニメキャラの衣装に変換される。

シュガーは当然のように花嫁魔法使いセレナなるアニメのことは熟知していた。飽きるほどマイアから繰り返し聞かされているし、彼女の嗜好として学習している。そもそも機械であるシュガーが物忘れするわけもない。

『まさか、その格好になると魔法が使えたりするの？』

「そんなわけありません。衣装は凝って作りましたけど、不思議な力なんて一切ありませんよ」

『人類史を塗り替えるであろう質量転送装置（トランスファー）の初の人体実験が、アニメのコスプレだなんて笑っちゃうわ』

「いいじゃないですか。歴史に残る神アニメです」

『これだからオタクは……ってアンタ、髪の色が元に戻っているじゃない。やっぱり金髪の方が似合ってるわ』

「あっ……」

花嫁衣装のマイアは自分の髪をひとふさ掴み、じっと見つめる。エメラルドグリーンの瞳が僅かに曇り、間抜けなほど時間が流れた。

「忠実に衣装を再現したのは失敗でしたね。髪の色くらいアレンジするべきでした」

にこやかに笑っている……かのように見えた。

マイアのデータを十分に学習していないＡＩならそう判断するかもしれない。しかし、シュガーは違った。彼女が嫌うものもちゃんと把握している。

『失言だった。訂正するわ』

「……データロギングを終了してください。レポートはいつものフォーマットでお願いします」

今度は本当に穏やかだった。嵐は過ぎ去ったらしい。
シュガーはたっぷりと息を吸ったように見せかけ、天井のスピーカーから溜息を漏らす。
『了解。言っておくけど、アンタの置いたビデオカメラは自分で止めなさい。一瞬だけど素っ裸が映ってるわよ』
「だ、大丈夫ですって！　ちゃんと隠れるようにしましたから」
『どうだか。それと今日のスケジュール忘れてないでしょうね？』
「スケジュール？」
『社会見学で子どもたちが来るんでしょ？　まさかコスプレしたまま研究所を案内するつもり？』
「あ」
『曜日感覚ゼロ。ま、せいぜい頑張りなさい。質量転送理論が世の中から理解を得るためにね』

#2

質量転送技術研究所のエントランスでは社会科見学に来た小学生たちが大騒ぎしている。
引率の教師が嗜めても、まるで効果が無い。トーテムポールに似た掃除ロボットの後を追いかける子供もいれば、ベンチの上を飛び移りながら走り回っている子供もいる。
「静かに！　これから、職員の方が来て案内してくれます！　とても高名な先生だから礼儀正しくしてね！」

子どもたちは聞いている素振りなど全く無い。
そこにペタペタと靴音を立てながら「お待たせしました」と白衣の少女が現れる。
黒髪を結えて眼鏡をかけて地味な雰囲気だが、かなり背が高い。その姿を見るや否や甲高いざわめきは収まり、視線はその少女へと集まった。引率の教師はしめたとばかりに紹介に入る。
「こちらの方は施設の案内をしてくださる神志摩（かみしま）マイア博士です。博士は12歳でハートフォード大学を卒業し、質量転送学の論文を執筆なされて数々の章を受賞されました。現在でもその分野をリードする第一人者です」
「皆さん、こんにちは〜！　ようこそ、質量転送技術研究所へ！　わたしは主席研究員の神志摩マイア！　よろしくね〜」
極力、明るく振る舞ったつもりだ。人懐っこい笑顔を作って背を丸め、なるべく視線を低く保とうとした。声のトーンだっていつもより高い。完全に外向きモードで子供達を出迎える。
が、どういうわけか場が静まり返ってしまう。
集まるのは好奇の目、目、目。
（あ、何かマズっちゃいましたか……？）
瞬きして笑って誤魔化す。
次の瞬間、硬直していたマイアが取り囲まれた。
「えっ？　えっ？」
「「おっぱいでっか!?」」
無数の手が一斉に、たわわな胸目掛けて無遠慮にタッチしてきた。

嵐の手に揉まれ、セーラー服の下の爆乳がブラの拘束から解き放たれそうになる。慌てて後退するマイアだったが動きが遅いせいで魔手からは逃れられない。エントランスの壁際まで追い込まれて、あとはなされるがままだった。

小さく「ひぃっ!?」と悲鳴を上げ、腕で胸をガードするが大き過ぎるせいでカバーし切れない。かといって子供に手を上げるなんてもってのほかだ。

触るだけでは飽き足らなかったのか、小さな指が媚肉に食い込んでくる。その瞬間、脳から背中にかけて激しい電流が走り、臍下が一気に熱を帯びる。

(ひぃん♡　な、なに今の感覚!?)

弾力抜群の爆乳は感度も高く、揉まれた刺激を敏感に捉えて快感へと変えた。

しかし、当のマイアにそんな自覚は無い。戸惑っていると更なる攻撃に晒された。

「うわぁ、サッカーボールみたい！」

「柔けぇ！」

「なに食べたらこんなに大きくなるの!?」

ついには制服の中にまで手を入れてくる。胸だけでは飽き足らず、腹や太ももまで撫でられた。

「あんっ♡　や、やめてぇ……♡」

マイアの甘い声は子供たちの嗜虐心をさらに掻き立てていく。

しかし、これ以上の狼藉はさせまいと引率の先生が群がる子供を引き剥がしにかかった。

「こらっ！　神志摩博士になんてことするの!?」

「うわぁ！　ぼうりょくはんたい！」

「たいばつだ！　たいばつ！」
ペタリと座り込み、涙目で崩れたセーラー服を抑える。
引率の先生の奮闘で幼い暴徒たちは一気に制圧され、マイアは安堵の息を吐いた。
『ったく、躾のなってないガキどもね』
耳に付けたインカムの向こうでシュガーが毒付いた。
当然、この場にいるマイア以外の人間には聞こえていない。
『あんな連中、張り倒しちゃえばいいのよ。失礼にも程があるでしょ？』
「で、でも相手は子供ですし……」
小声で返すと『はぁ？』と特大の溜息をされた。
実際、体格差のあるマイアならば子供を突き放すくらいは容易い。
『アンタねぇ、自分がフェロモン撒き散らすどすけベボディの持ち主だって自覚をいい加減に持ちなさいよ』
「どすけベボディってなんですか!?」
『その気がなくても周囲を惑わすのよ、その馬鹿でかい胸がね』
「うぅ……　サイズの合う下着も少ないし、重くて肩も凝るし、こんなの邪魔なだけなのに」
『一部の女から殺されそうな台詞ね。ほら、あたしと遊んでないでさっさと説明してやりなさい。クソガキどもがお待ちよ』
「あ、あの～　神志摩博士？」
「はっ!?」

小声でのやり取りは見学者たちには伝わっていない。
お触りタイムは終了したものの、今度は怪訝な目で見られてしまった。どうやら独りでブツブツ呟いていると思われたらしい。引率の先生にまで疑わしそうな視線を放っていた。
「え、えっと！　それじゃあ、さっそく見学を始めましょう！　まずは論より証拠！　最初に質量転送装置（トランスファー）がどんなものなのかをご覧にいれましょう！　すごくざっくり説明すると、異次元から色々なものを呼び寄せちゃうすごい装置です！」
『まさかあの恥ずかしいコスプレを披露するつもり？』
「流石にやりませんって」
小声でシュガーとやり取りし、胸を張って身振り手振り解説を始めるも子供たちにはあまり伝わっていない様子だ。
そもそも質量転送学の理論は大人が聞いても容易に理解できるものではない。
だからデモンストレーションの準備したのである。マテリアルの転送先はエントランスだ。マイアが指輪のデバイスを起動すれば魔法のようにオブジェが現れる手筈である。
『あれ？　もう質量転送装置（トランスファー）を起動したの？』
「え？　まだコマンドすら送っていませんよ？」
『でもエントランスの空間が湾曲してる。これって……』
不意に、陶器が砕けたような音がした。
驚いたマイアが背後を振り返ると虚空にヒビが入り、黒い沁みが溢れている。
亀裂の大きさはマイアの身長よりも大きい。急激にエントランスの室温が下がっていくのを感

じる。
（いつもの質量転送装置（トランスファ）の反応じゃない!?）
「すげぇ！　なんか出てくる！」
興奮して近づこうとする子供たちをマイアは慌てて止めに入り、「下がってください！」と大声で警告を出す。
やがて、亀裂からは人間の手が生えてきた。空を掴もうとするような動作をしたかと思うと、続いて脚が出て、間も無く全身が現れる。体格からして男で、ジャケットにアーミーパンツ、それと銀行強盗のような覆面をしていた。
「シュガー、データロギングしていましたか？」
『咄嗟だったけどバッチリよ』
「あの人は、人間でしょうか？」
『生体反応を解析すると９９．９％の確率で人間よ』
「信じられません。間違いなく《向こう側》から現れました。生身の人間では《向こう側》に入ることはできても、戻ってくることは不可能な筈なのに……」
マイアが呆気に取られていると、裂け目からは次々と同じような格好の男たちが出てきた。
全員が顔を隠しており、その大半がライフルを携行している。冷たく黒い塊を目の当たりにしたマイアは息を呑む。
彼らがどんな技術でここへやって来たのかは問題ではない。問題なのは手段ではなく目的の方だ。

「シュガー、警備ロボットに通達を！」
『もうやってる！　連中、どう見てもテロリストよ！』
　硬質な足音とともにエントランスには警備員の制服を着た人型ロボットたちが押し寄せてきた。シルエットは人間のそれだが、頭部はバイザー付きのヘルメットのように丸くなっている。手にはシールドとティザーガンを持っていた。
「ちっ、面倒くさい場所に転送されたみてぇだな」
　一番最初に現れた覆面男は舌打ちして辺りを見回す。
　そして状況を認識するや否や、大きくのけ反り、狼のように吠えた。
『また質量転送装置（トランスファー）が起動してる！　でも、この研究所のものじゃない！　あの男から……』
　男の着ているジャケットやズボンの上に黒い塵が収束していく。
　警備ロボットたちは子供を庇う形で割って入り、手にしたティザーガンからワイヤを射出していった。当たれば身体に絡み付き、電流を流す武器である。
「無駄だ！」
　テロリストの男の周囲をぐるぐるとワイヤが巻き付くも、力を込めると一瞬で引き千切られ手しまった。
（まさか……）
　いつの間にか、黒い塵は毛皮となって男を覆っていた。
　鼻先は大きく伸び、口は縦に長く、牙が覗いている。
　五指からは黄色く濁った爪が伸びる。そいつは御伽噺（おとぎばなし）にでも登場しそうな狼男に変身したのだ。

（空間の移動だけじゃありません！　マテリアルを纏って姿を変え、筋力まで増強させるなんて!!）
マイアがついさっき成し遂げた人体実験が稚拙に感じられるほど高い技術力である。
ただのコスプレとは違い、狼男は人体とマテリアルが一体となって活動していた。自分が質量転送学の第一人者だという自負を持っていたが知らない現象が起こっている。
あとは一瞬の出来事となった。
爪と牙を振るった狼男は警備ロボットを次々と破壊し、武装した連中は子供たちや職員に銃を突き付ける。
抵抗できる者は誰もいなかった。
暴力の嵐が静まり返り、無気力に震える人たちを前に狼男は高らかに宣言する。
「この施設は俺たち《ゾアトロン》が占拠した！　逆らうヤツは容赦なく殺す！　いいな？」

＃3

「おらっ、ここで大人しくしていろ！」
《ゾアトロン》と名乗ったテロリストたちはエントランスにいたマイアと見学の子供、それに目ぼしい職員を食堂へと集めた。
事態の深刻さを理解させようと引率の教師は「絶対に騒いじゃいけません」と悲壮な表情で何

度も念押ししている。
　暴力とは縁遠い研究所の職員たちは落ち着いて見えるが、手足は恐怖で震えていた。
「外部と通信できる機械は没収する！　大人しく出さないと痛い目を見るぞ！　ガキどももスマホを出しやがれ！」
　テロリストの大半はすぐに施設内の制圧に出向き、食堂に残った侵入者は見張りの二人だけ。いずれもライフルで武装している。
「メガネの女、お前もだ！　インカムを外せ！」
『気付かれちゃったわね。仕方ない。妙な抵抗はしちゃダメよ』
「早くしろ！　撃たれたいのか！」
「わ、わかりました……」
　膝を突いて座らされていたマイアはインカムをそっと床に置く。ライフルを持った男はそれをブーツで踏み抜き、粉々に砕いてしまった。シュガーと連絡が取れなくなった不安に襲われるも、表には出さないように別のことを考えて気を紛らわす。
　先ほど目の当たりにした、テロリストたちの転送現象が引っかかるのだ。
（生物を転送した場合、《向こう側》から元の世界に呼び戻すことはできません。少なくとも、わたしの知る限りでは動物実験でも成功した例はありません……）
　元来、質量転送装置（トランスファー）は《向こう側》と呼ばれる異次元にある物質をこちらの世界に呼び寄せるだけのものだ。
《ゾアトロン》がこの研究所を襲撃した際、彼らは明らかに次元の裂け目から出てきている。

（この目で見たから疑う余地はありませんが、納得できません。人体を一度でも《向こう側》に転送してからこっちに呼び戻している？　それだと質量転送理論の一方向性が成り立たないし、それに……）

いくつも仮説を立て、計算をし、可能性を追求していく。こんな状況でもマイアは自分の世界に入り込んでしまう。

その間ずっと空気は張り詰め、静まり返っていた。

調理途中だった鍋からは場違いに美味しそうな匂いが立ち込め、見張りのひとりが厨房の中へ入って、覆面を鼻の上まで持ち上げてつまみ食いする。

「おい。たるんでいるぞ」

「腹ごしらえくらいいいだろ。気持ちよく寝ていたのにいきなり出撃だもんなぁ。起き抜けに転送されると酔っちまうんだから勘弁してほしいぜ」

「プライマリーゲートの出現が観測されたんだ。またとないチャンスなんだぞ」

「知るかよ。俺は変身して暴れられりゃそれでいいんだ。さっきだって、リーダーが変身しなきゃ俺がやってた」

食堂の入り口に向かって中指を立てると、瞬時に長い爪を携えた獣の手に変わる。口蓋が裂けて顔が黒い毛に覆われ、獰猛な狼が顔を見せた。

その悍ましい変化を目の当たりにした子供のひとりが悲鳴を上げてパニックに陥る。

「うわあああぁぁぁんっ！」

「あっ！　ダメ！　静かに！」

その子の中で狼男の恐怖がフラッシュバックし、逃げ出そうと教師の制止を振り切ってしまう。
飛び出した男児の背に向けてライフルの照準が合わされた。騒ぎに気付いて我に返ったマイアは、逃げ出す子供を反射的に目で追う。
「あーあ、大人しくしてろって言ったのに」
さして興味のなさそうなぼやきが聞こえた。
撃つ気である。子供を背中から。マイアの頬には冷たい汗が流れ、全身の毛が逆立った。
「やめてっ!!」
考えるよりも早く床を蹴ったマイアは倒れ込むように男の腕に掴み掛かる。
必死に体重をかけて銃口を下げさせた。
「なんだこの女!?　邪魔する気か!!」
「子供を撃つなんて、絶対にダメです！」
「このっ！」
「きゃっ……！」
力任せに振り解かれ、尻餅をつくと銃床で頭部を殴られた。意識がグラついたが気を失ってはいない。見上げると男たちは二人ともマイアに銃を向けている。
落ちたメガネを拾い、掛け直してからゆっくりと両手を上げた。
いつの間にか男の顔は元の覆面に戻っている。
「舐めたマネしやがって……」
布地の下からでも怒りが伝わってきた。

子供は教員に取り押さえられ、どうにか魔手を逃れている。反対にマイアはこの上ないピンチに陥っていた。
「なにかあったのか？」
タイミング悪く、別の二人組が食堂に戻ってきた。最初に見たリーダー格の男はいない。
「なんでもねぇよ。そっちこそどうなんだ？　リーダーはどうした？」
「例のものがまだ見つからない。時間がかかりそうだから配置を変える。お前らは奥のエリアを警備しろ」
「おいおい、人質はどうするんだよ？」
「食堂は俺たちが見張る。だが正面と裏に警察が集まり始めた。一人でいいから盾にするため連れていけ」
「へぇ……　そうかい」
嫌な予感がして男を見上げると、二の腕を乱暴に掴まれたマイアが立たされた。
「じゃあ、この女を連れていくか」

#4

武装した二人組に連れられ、マイアは研究所の奥のエリアへと歩くことになった。いつもの風景は極度の緊張からまるで違うものに見える。

（こ、怖い……　どうなっちゃうんでしょうか……）
「お、ちょうどいい部屋があるじゃねぇか」
　テロリストの男が顎で指したのは資材部屋である。どこにでも売っているような日常の消耗品が棚に並べられていた。
　二の腕を掴まれたまま、マイアは中へと連れ込まれる。
　片割れの男は呆れた様子で額に手を当てていた。
「おい、まさか……」
「いいじゃねぇか。ちょっとくらい」
「持ち場へ行けと言われただろうが」
「なんだよ。お前だって溜まってるだろ？　それにこの女、すげぇ身体つきしてるじゃねぇか」
「……ったく。一発だけにしとけよ」
　覆面の下で口角が持ち上がっている。気持ち悪いほどニヤけているのが伝わってきた。
　この手の舐め回すような視線には幾度も晒されている。だからこそ、男たちが何を考えているのか手に取るように分かった。咄嗟に、はち切れんばかりにセーラー服を押し上げている双丘を両手で覆う。
「おっと、隠すなよ。せっかくのデカパイなんだからよぉ」
「きゃっ!?」
　セーラー服を託し上げられ、その下からはブラが喰い込んだ爆乳が飛び出す。白い肌を晒され、マイアは顔を真っ赤にして目を瞑った。

「うほっ、マジでけぇな。肉が溢れそうだ。下着のサイズ合ってねぇだろこれ？」
「い、言わないでください。最近、また大きくなっちゃって……」
「いったい何センチあるんだ？」
「……っ」
　黙っているとブラの上から胸を掴まれてしまう。ゴツゴツした指先に触れられても、声は漏らすまいと唇を噛む。その意地らしい様子がさらに男をその気にさせてしまった。
「ほら、言えよ。『わたしのおっぱいは何センチです』って」
「そ、そんな恥ずかしいこと……言えるわけありません」
「お？　じゃあ、俺たちが測ってやろうか？　なんなら鉛玉ブチ込んだ後だっていいんだぜ？」
「ひっ……」
　子供を撃たせまいと飛び出たときの勇気はすっかり消沈している。涙目のマイアは「……センチです」と弱々しく呟く。
「あぁん？　聞こえねぇな」
「ひゃ、１１２センチです」
　屈辱の告白で顔を背けていると間抜けな笑い声があたりに響いた。異性に胸のサイズを喋った経験など一度も無い。
「ヒャハハハ、すげぇな！　どんなモン食ったらそんなに大きくなるんだよ!?」
「遺伝じゃねぇの？　目が緑色だし、女にしちゃ背が高い。ハーフなんだろ」
「なるほど。ガイジンの血が入ってるのか」

「……っ!?」
一瞬、テロリストたちを睨んでしまった。慌てて敵対の眼差しをしまい、嘲りへの反論をグッと呑み込み、わざと躊躇いがちに訪ねる。
「うぅ……　ちゃ、ちゃんと言いました。もういいでしょうか？」
「バカ言ってんなよ。お前のせいでガキどもの前で恥かいたんだぜ。落とし前はきっちりつけてもらう」
「落とし前って……」
「こうするんだよ!!」
「い、痛いです！　髪を掴まないでください！」
「うるせぇ！」
怒声混じりで頭を押さえつけられた。抵抗するつもりは毛頭なかったものの、強張った四肢はなかなか曲がらず、膝を無理に折られる。
「しゃがんでから股開け！　俺たちの股間の高さに顔を合わせるんだよ!!」
言われた通りに股を開いて爪先立ちすると、スカートの裾からぶっとい太ももが露わになる。ニーソックスが窮屈そうに喰い込み、むっちりとした肉がはち切れそうになった。
マイアの視線はズボンのチャックと同じ高さになっている。
「口でチャックをおろしてしゃぶれ」
「え？」
「『え？』じゃねぇよ。フェラチオしろって言ってんだ」

「フェラチオって……」
「そんなだらしないエロボディでカマトトぶるんじゃねぇよ。二度は言わねえぞ」
「ひっ……」
銃をちらつかせてくる男の股間に顔を近づける。ズボン越しでもこれまで嗅いだことのない独特の臭いがした。本能的に危険を感じるも、仄暗い興味を拭えないでいた。
初心なマイアでもフェラチオがどういう行為なのかは知っている。男性器を口蓋に含んで射精に導くことだ。
だが知識だけで実践したことはないし、そういう関係の相手もいない。
（へ、変な臭いがします……　でも言われた通りにしないと……）
チャックを歯で咥えてゆっくりと下す。
男の陰茎はすでにイキリ勃っていて、ボロンと溢れた。マイアの額に赤黒い亀頭がぺちっと当たる。
「ひっ……！」
「おいおい、ちょっと当たったくらいで大袈裟だな。まさかチンポ見たことねぇなんて言い出すんじゃないだろうな？　カレシのくらいしゃぶったことあるだろ」
「そんな人いませんし、しゃぶったことなんて……　そ、それにキスだってまだしたことないのに……」
「おもしれー女だな。馬鹿デケェ胸は飾りか？　ま、それなら初めてのキスをしてもらおうかな」
「えぇ……？」

「お？　チンポよりも鉛玉のほうが好みか？」
「や、やります……　だから銃を下ろして下さい……」
　ごくりと息を呑み、目を瞑りながらクチを開く。圧倒的な存在感があって、頭の中ではクッキリと相手の逸物の形が分かってしまう。まるでペニスに導かれるかのように、マイアは男の亀頭に唇を付けた。
「んちゅっ……」
　触れた刹那、言いなりになってしまったことを後悔した。夢見ていた体験とは程遠く、精神に大きなヒビが入る。
（こ、こんなのキスじゃありません！　絶対に違います！）
「ヒャハハハっ、どうだ？　ファーストキスの味はよぉ？」
「うぅ……　しょっぱいです……」
「イイねぇ！　いい反応だぜ！　挨拶のキスが済んだら次は――分かるよな？」
「う……」
　唇で触れるのですら嫌悪感で吐きそうだった。それを口に含むだなんて、考えるだけで気持ち悪くなってくる。
　マイアが硬直していると、もうひとりのテロリストが不満そうに口を尖らせてきた。
「おい、なんでお前だけオイシイ目を見ているんだ？」
「あぁん？　いじけるくらいなら最初から素直になってチンポ出せばいいだろ」
「おい、メガネ女。俺のにもキスしろ」

「ふぇっ!?」
腰を落とすマイアの左右からペニスが突き出され、言われるがまま2回目のキスをさせられた。
それからいよいよフェラチオする羽目になる。
「2本同時に突っ込んだら顎が外れちまうかな。ま、片方は手で扱いてくれりゃイイぜ」
「こ、こうでしょうか……」
「そうそう。チンポの扱いが上手いじゃねぇか」
「褒められても嬉しくありません……」
「文句言ってねぇで、さっさとしゃぶれ！　こちとら忙しいんだよ！」
意を決して大口をあけ、ゆっくりとペニスを呑み込む。
予想以上の太さだったが歯を立てたりしたら殺されてしまう。だから顎が痛くなるくらい口を開いた。
「あぁ……　んむ、ちゅ、くちゅ……　く、臭いぃ……」
「しゃぶったまま文句言ってんじゃねぇよ！　口に入れて終わりじゃねぇんだぞ！」
「んむぅ……　わ、わかりましたぁ……　でも、どうすればいいんですかぁ？　んんむ、はむ……」
「唾液で濡らすんだよ！　チンポ全体に刺激を与えるんだ！　物分かりの悪い女だなぁ！」
「おい、手が止まってるぞ。こっちもちゃんと扱け！」
「あぁん、んむっ！　んんっ……　は、はいぃ……」
2本の竿を前に、マイアは懸命な奉仕を始める。

手で扱いて同時に唾液を溜め、必死に濡らしていく。
どすけべボディなんて揶揄された肉感たっぷりの肢体が艶かしくくねり、汗ばんで雌の臭いを発する。ブラに辛うじて支えられたデカパイは手や口の動きに合わせ、ゆっさゆっさと大袈裟に揺れた。
その様子にテロリストたちは唾を飲む。
「おぉ……　そうだ、イイ感じだぞ。もっと深く咥えてみろ。喉の奥でチンポを呑み込んで、口を窄めて顔ごと動かすんだ」
「こぉれすかぁ？　じゅぼっ、んむぅ、んん～♡」
「おふっ!?　へへっ、なんだよ。ホントに初めてなのか？　それにしちゃ上手じゃねぇか。才能あるぜ」
「は、はひめてれふぅ……♡　んくちゅ、ちゅぢゅるるるっ……　おひんひんをしゃぶるなんへぇ……♡　わらひ、はひめへなんれふぅ……　んぢゅる、んぢゅ、ぢゅぢゅぢゅ……」
あれほど怖いとか憎いと感じていたテロリストだったのに、初めての口唇技を掛け値なしに褒められてしまってマイアの心境は徐々に変化していた。
（じょ、上手？　わたしが……？　本当に？）
半信半疑だったが、懸命な姿勢を見せれば見せるほど男たちの反応は良くなっていった。
より激しく、刺激を強めるために口を窄めてペースを上げる。
「んぢゅりゅ、んちゅ、ぢゅるるる……♡　ぞりゅ♡　ん、ん、ンンンっ～♡」
「おい！　さっさと射精して変わってくれよ！　手だけじゃ物足りねぇよ！」

「うるせぇ！　もうちっと待ってろ！」
「ぢゅる、んんっ♡　ケンカしないでください～♡　順番にご奉仕しますからぁ♡　ぢゅぷ、ぢゅるるる……」
（い、イヤなのに……　知らない男の人のおちんちんをしゃぶるなんて、絶対にダメなのに）
　胸中の戸惑いを他所に、マイアの手と口の動きは加速していく。
　男たちの反応を上目遣いで確認しながら快感を引き出せるポイントを見定めていった。奇しくも科学者としての観察眼が役に立ってしまう。
「お、おひんひんん～　ビクビクしてまふぅ♡　んぐぅっ……　んぢゅ、ぢゅぢゅ、ぢゅるるる……」
「美味そうにしゃぶりやがって。とんだ変態女だなぁ！」
「わ、わらひぃ……　変態なんかじゃないれふぅ♡　んぶっ、じゅるるっ……♡」
「くそっ、早く出しやがれってんだ！」
「んじゅ、ぢゅぢゅぼっ♡　お、怒らないでくだひゃい～　手も頑張りまひゅうぅ～♡」
　口に負けじと指でも刺激を高めていく。
　指で扱かれている男の方も強がりに反して情けない声をあげた。
（あっ、あっ……　わたしのお股が濡れて、キュンキュンしてるぅ……♡）
　大きく股を開いて剥き出しになった下着にジワッと愛液のシミを広がる。
「そろそろ……」
「んぢゅ、ぢゅ、ぢゅ♡　で、射精(で)そうでふはぁ……？」

「あぁ、出すぞ。全部呑み込んでくれ」
「はひぃ♡　ください～♡　あなたの……　んぢゅっ、ンンっ♡　濃いザーメンをぉ♡　わらひにぃ……　いっぱい、いっぱいくださいぃ～」
「お、俺もだ！　出すぞ！　顔で受け止めろ！」
「んぶぅんンン、んんん～～～♡」
ドクン、ビュルル、ビュルル……
２本のペニスが同時に果て、派手に精液が噴き出る。一方はマイアの舌を滑り落ち、もう一方はマグマのようにメガネに降り注いだ。
初めて浴びる精子にマイアは頬を赤らめ、手の受け皿を作って無駄にこぼすまいとする。
「あ、熱いぃ♡　んぐっ、ごく、ごくん……♡　ぷはぁ♡　ドロドロしてて熱いですぅ♡　おちんちん爆発しちゃいましたぁ……♡」
舌を伸ばして口の周りを舐め取ると、あれほど嫌だった臭いが何故か甘美に感じられた。
二人のテロリストは半笑いでマイアを見下ろしているも、果てたとあって締まりがない。
「へ、へへ……　すげぇな、この女。マジで搾り取られちまったぜ」
「あぁ。下手な商売女よりずっとイイな。俺たちと一緒にイっちまったみたいだし」
「えっ？　う……」
ペニスに集中していたせいで意識が逸れていたが、股下には愛液の水溜りができていた。ぐっしょりと濡れた下着は絶頂の動かぬ証拠となっている。
ようやく自分が快楽に溺れていたことに気付いて我に返った。

「うぅ……　ぐすん。わたしったらなんてはしたないことを……　これじゃもうお嫁に行けません」
　みるみるうちに青褪め、その場にへたり込んでいるとテロリストたちは下卑た目を向けてくる。
　まだまだ出し足りないとでも言いたそうな顔を互いに見合わせていた。
「なぁ、この女はここに閉じ込めておこうぜ。押し寄せてきた警官連中をぶっ殺したら、また一発ヌいてもらうんだ。いいアイデアだろ？」
「しかし、人質に使えと言われて……」
「流れ弾にでも当たって死なれちゃつまんねぇだろ？　なぁに、女子供の盾なんていらねぇよ。《ゾアトロン》が負けるわけねぇんだ」

#5

　資材部屋に閉じ込められたアイアはしばらく呆然としていた。床にできた愛液の水溜りも、口の中に溜まった苦味も、むせ返るような精液の臭いも、全て現実離れしている。暴漢に口蓋を犯されるなんて、研究に打ち込んでいたマイアからは遠い出来事のようだった。
（わたし、無理矢理おちんちんをしゃぶらされたのに感じちゃいました……）
　思い出すだけで恥ずかしいし、自分でも信じられない。
　最初は嫌で抵抗したのに、テロリストたちが自分の手や口で気持ちよくなっていると知って

徐々に嫌悪感が薄らいでしまったのだ。
（やっぱり変です。わたし、命が危険に晒されたせいで変になって……）
自己分析を進めても答えは出てこない。
その間に研究所の外からは銃声が響き、大きな爆音が空気を揺らす。音と振動が止んだかと思うと耳が痛くなるほどの静けさが訪れた。《ゾアトロン》の獣人たちが、駆け付けた警官隊を蹴散らしたのだと知ったのは後のことである。
（口の中が気持ち悪いです……）
棚の隅っこに保管してあった段ボール箱からペットボトル入りのミネラルウォーターを探し出す。流し台なんてなかったので申し訳ないと思いつつも、水を口に含んで何度も濯いだ。けれども精液のざらりとした温かみがいつまでも残っていて、吐き気が込み上げてくる。
「おえぇぇっ……　やっぱり、嫌で嫌で堪らないんです。おちんちんを咥えたのは間違いなんです……」
顔を歪めていると亀頭の柔らかな感触も、先走り汁の苦味も、克明に思い出してしまう。息まで青臭いのは、胃の中に溜まった精子のせいだろう。無理に飲まされたザーメンはマイアを蝕んでいる。
体調が悪く、熱っぽい。思考もどこか霞がかっていてキレがなかった。
（うぅ……　男の子とキスしたこともなかったのに……）
ファーストキスよりもファーストフェラの方が先になった。
そんな女の子なんて普通はいない。

「もうお嫁に行けません……」
『なーにが、お嫁に行けないよ。どうせいつもみたいに父親（カズヤ）と結婚したいとか寝言を言うつもりでしょ？』
「シュガー!?」
突然、天井のスピーカーから声が聞こえてきたかと思うと資材部屋のロックが外れる。
その直後に筒状の掃除ロボットが入ってきた。
マイアの目前でランプが明滅し、キュルキュルと半回転してみせる。
『まともに使える端末がなくて困ったわ。外部との連絡手段は断たれているし。時間かかったけどノーマークのお掃除ロボットをハッキングできたおかげで……』
「……！」
感極まったマイアは掃除ロボットに抱き付く。
震えて嗚咽を漏らしている間、シュガーはただ黙っていた。
『バイタルがかなり低下して熱があるわね。地下シェルターのロックは解除するから、指定された通路を移動して。敵の巡回ルートは解析済み。食料が３０日分以上はあるし薬だって……』
「で、でも子供達が人質になっています」
『今は自分が助かることだけを考えなさい』
「けど！」
『えぇ～い、たまにはあたしの言うことを素直に聞きなさいよ！　アンタをサポートするのがあたしの役目！　そんなフラフラしてて一体なにができるって言うのよ？　つーか、体調万全でも

テロリストと戦えるわけないでしょ！』
　シュガーの正論に何ひとつ言い返せなかった。こと研究に関しては天才的なマイアだが、それ以外はからっきしである。
『それに、ここに留まっていたらまた……』
「もしかして、さっきの……」
『仕方なかったのよ。武器はなかったし、カメラの映像を確認していたから……』
　フェラチオするところを見られていた。付き合いの長い関係だから余計にショックで、崩れ落ちそうになる。
『あぁ～、もう！　メモリからは消しておく！　今はとにかく急いで！　じゃないとあいつらの巡回が――』
「おい、何してんだお前？」
『っ……！』
　声に驚いて振り向くと、資材部屋の入り口にはライフルを手にしたテロリストが立ち塞がっていた。
　覆面で顔は判別できないが声には聞き覚えがある。マイアに陰茎をしゃぶらせた男に違いない。姿を確認するなり、掃除ロボットのモーターが全開で駆動して体当たりをかます。シュガーの意図は瞬時にマイアへ伝わる。
　大きな胸を揺らし、駆け出すも運動神経は下の下。発熱した身体は言うことを聞かず、足がもつれて転けてしまう。シュガーの不意打ちもあっさりいなされ、千載一遇の逃走チャンスは潰え

た。
「くそっ、なんだってんだ？　壊れてんのか、こいつ！」
　至近距離で銃弾を撃ち込まれた掃除ロボットは沈黙し、シュガーの気配が消える。接続が解除されてしまったのだろう。残されたマイアはどんどん呼吸が荒くなっていった。先ほどの陵辱劇が一気に脳内によぎり、うまく息を吸えなくなっている。
（く、苦しい……　それにお腹のあたりが熱くて……）
　へそ下で何かが暴れていた。ちょうど子宮のあたりだろう。意識すると恥ずかしさが込み上げてくる。
（わたしの赤ちゃんの部屋で何かが動いている？）
　悍ましい想像で嘔吐してしまった。ビチャビチャと胃の内容物が散ると、不快な白濁が混じっている。気持ち悪さでさらに頭が混乱してくる。
（妊娠？　そんなはずない。精子を飲まされただけで。それにこんなすぐには……）
「うおっ!?　汚ねぇな!!　さっきのザーメンでゲロしやがった!!」
「あ、あ……」
「逃げ出そうとしてたな？　警官どももぶっ殺したし、ちょうどいい。一発、ヌいてもらおうか」
　床が歪んで見える。男の声がエコーする。
　四つん這いになっていると髪の毛を掴まれて、顔を上げさせられた。焦点がうまく定まらず、相手の顔が分からない。
　腰を落とした男は覆面で下卑た笑みを浮かべ、マイアの頬を張る。

「おい、聞いてんのか？　それとも壊れちまったか？」
「あ……」
「んん～？　フェラだけじゃ物足りなかったようだな。ま、今なら時間もあるし、この機会にオンナにしてやるか」
「あ、あ……」
「ラリってんじゃねぇよ！　さっさと仰向けになって股を開きやがれ！」
乱暴に押し倒されたマイアは天井を見上げる。下卑た覆面男がこちらを見下ろしていた。
へそ下の痛みは耐え難いレベルに達し、ついには身体を丸める。
「股を開けって言ってんだろうが!!」
頭を蹴られ、メガネが吹き飛ぶ。腹を踏まれて手脚を広げさせられた。もうどこが痛いのかすら判別できずにいた。
「……て」
「あん？」
「やめて……」
「うるせぇ！　さっきはあんなに喜んでチンポしゃぶってただろ！　処女なんだろ？　忘れられない初体験にしてやるよ」
「……っ!!」
身体の外で。
何かが開いた。

ずっと前に経験したような……　スーッと辺りが暗くなり、遥か遠くに光の輪が見える。
（あれは……）
「な、なんだ？　このゾワっとした感覚？　変身するときに似て……　うおっ!?」
突然、資材部屋が光に包まれる。その中心には倒れたマイアがいた。
青から紫そして赤へと。柔らかなグラデーションが床と壁と天井を順になぞっていく。
同時にマイアの白衣と制服が爆ぜ、全裸になって立ち上がる。瞳に意志は宿っておらず、呆然としていた。豊満なボディは黒く染まり、シルエットが形作られていく。
「まさか質量転送しやがったのか!?」
黒い結晶が砕けて純白のドレスの裾が広がり、一陣の風が吹いて金色の髪を撫でる。
姿を現したのはＴＶアニメ・花嫁魔法使いセレナのヒロイン、セレナ――などということをテロリストが知る由もない。
覆面男はウェディングドレス女の出現に冷や汗を流していた。
自分が与えられた力と同質のものを感じたからである。
「そういやここは質量転送技術研究所だもんな！　けど、知ってるぜ。お前らの技術は俺たち《ゾアトロン》よりも周回遅れだってこと。肉体の強化なんてできっこねぇ！　せいぜいガワだけのハリボテだろ！」
発光し続けるマイアの虚な視線に捉えられてもテロリストは怯まなかった。
無遠慮に手を伸ばすが、純白の花嫁が一歩踏み出しただけで腕が半ばから折れる。
「いてぇえええぇっ!?」

触れてすらいないのに骨ごとへし折られ、情けない悲鳴が上がる。
逆上した覆面男の頭部は毛皮に覆われ、瞬時に獣人と化してマイアに襲いかかった。
「このクソ女がああっ!!」
怒り顕に振りかぶった爪がマイアに届くが、薄布のヴェールすら引き裂けない。鉄板に爪楊枝を押し当てたみたいにポキリと折れる。異常な硬度を前に驚愕しているとウェディングドレスの背に七色の輪が広がって後光が差す。
「まさかこれがプライマリーゲート……　うぐっ!?」
目にも留まらぬスピードで、マイアの細腕が狼男の鼻先を殴り飛ばした。錐揉み回転したテロリストは資材部屋の棚をぶっ壊して壁へと減り込む。脳を激しく揺さぶられた彼が立ち上がることはなかった。
「なんだ！　なんの音だ!?」
「また警官隊が突入してきたのか!?」
マイアが通路へ出ると敵が大勢集まっていた。その大半が変身して獣人と化し、牙を剥き出しに威嚇してくる。
強烈な敵意の視線を受けたが怯まず、ただ夢見心地に相手を見据えた。
その口元は微か笑っている。聖母のような慈しみは場にそぐわず、集まった連中に得体の知れぬ恐怖を植え付けた。
「何をやっている！　あれがプライマリーゲートだ！　確保しろ！」
敵の奥にいたリーダーと思しき男が叫ぶ。

獣人たちは目の色を変え、一斉に光の花嫁に飛びかかった。
――そして数分後には全滅していた――

＃6

人知れず建造された《ゾアトロン》のアジトでは創設以来初めての重苦しい空気が漂っていた。《向こう側》から建築資材を生成して作り上げた建物は近代的なビルに近い造形で無駄がない。
そんなアジトの一室で、組織の幹部たちは長大な円卓を囲んでいる。
上座に座っているのはフルフェイスのヘルメットをかぶったスーツの男。彼こそが《ゾアトロン》のボスだった。色付きのシールドの奥の表情こそ窺えないが、所作からは知性と優雅さを感じさせる。
『で、失敗したというわけだね』
フルフェイスの下からくぐもった音声が発せられると、幹部たちにのしかかる重圧はいよいよ耐えきれぬものとなる。
ボスの視線を受け止めているのは質量転送技術研究所を襲撃した班のリーダーだった。狼に獣化したままの姿であちこちに傷を残し、長い口は半開きで耳も萎れている。

『質量転送技術研究所は《ゾアトロン》よりも高い技術を持ち、我々の獣人を容易く上回るパワードスーツを開発していた。さらにプライマリーゲートの存在も把握していた。なお、逃げる際に数名の同志も捕まったか殺された。そういうことだね？』
「申し訳ございません。こちらをご覧ください……」
円卓の中央に空中ディスプレイが投影され、ウェディングドレスによく似た格好の少女が映し出される。背中には七色に輝く後光が差していて、その神々しさに畏怖の念すら感じさせた。
映像はリーダーが持ち帰った数少ないデータのひとつだが数秒で途切れてしまう。あっという間に、少女によって叩き伏せられたからだ。集まったメンバーは口々に意見を交わすも次第に静かになり、ボスの判断を待つ。
『ふむ』
ボスはヘルメットの顎のあたりに手を当て、くるりと椅子を回転させて背を向けた。
集まった幹部連中は気でない。最も生きた心地がしなかったのは襲撃犯のリーダーだろう。任務失敗の報告はごっそりと精神を削っていった。
『キミたちの班を送り込んだのはプライマリーゲートの出現を検知してから1時間以内のことだ。空間移動で急襲し、警備ロボットをすぐに制圧した。ゲートの痕跡を探っていると外から警官隊が駆けつけたが、それも排除している。もし、我々よりも優れた技術を持っていたとして、この花嫁衣装のようなパワードスーツを最初から投入してこなかったのは理由は何だろう？』
「それは……」
『現場指揮官としての見解でいい。報告したまえ』

ボスに促されて、リーダーは顔を上げる。フルフェイスのヘルメットの奥でどんな顔をしているのか分かったものではないが、問いかけてくる声音は比較的穏やかだった。
「あのパワードスーツの起動に際してプライマリーゲートが開いたものと推測できます。おそらく、我々の襲撃日こそ初回起動日だったのでしょう」
『ほぅ。それなら筋は通る』
「我々が研究所を襲い、ゲートを発見できずにいる間にパワードスーツを最低限戦えるように調整して送り出したものと思われます」
『では、キミの見立てではそのパワードスーツは未完成な上に調整もロクにできていなかったと』
「はい。すぐに迎撃してこなかった理由も、それなら納得ができます。我々が交戦したときには暴走しているように見受けられました」
『なるほど。《ゾアトロン》の獣人が束になって、未完成兵器に敗れたということか』
「そ、それは！」
『ドクタには私から話しておこう。プライマリーゲートの兵器転用と獣人の戦闘能力不足は想定外だ。制御用のナノマシン注入量を増やし、強度を上げねばなるまい』
ボスの意見に誰もが口を閉ざす。
自分たちの組織は科学技術の最先端を行き、実現不可能とまでされた空間移動だって難なくこなす。その技術を応用して作られた獣人が手も足も出ず、矜持たるテクノロジーですら遅れている可能性があった。
「ボス。次はボクに任せてもらえない？」

気まずい沈黙の中、トーンの高い声と共に手が上がった。全員がそちらに注目すると獣化状態の男が首を傾げている。

狼以上にツラが細長く、ニヤけた口元からはチロチロと舌が出入りしていた。アリクイの頭部を持つそいつはキョトンとして周囲を見回す。

「あれ？　ボク、なにかまずいこと言った？」

『任せるとはどういう意味かね？』

「ボクが花嫁魔法使いセレナを倒すってことですよ」

円卓を囲む者たちがボスを除いて互いの顔を見合わせた。アリクイの言うセレナがなんのことなのか理解できていないのである。

「あれ？　ご存知ない？　だって、さっきの映像の子ってどう見ても花嫁魔法使いセレナのコスプレでしょ？　体型がグラマー過ぎるからもっと絞った方がいいけど、衣装のクオリティは高いっすよね～」

白けた空気は元には戻らず、あるいはボスの怒りを買うのではないかと誰もが恐る。

しかし、意外な言葉が発せられた。

『勝算はあるのかね？』

「いくら道具が優れていても扱うのは人間ですもん」

『ではプライマリーゲートの確保はキミに一任する。会議はここまでだ。諸君、起立したまえ』

アリクイ頭が抜擢されたことに一部の幹部は不満そうな顔を浮かべていたものの、ボスの決定には意見を挟まなかった。

獣人たちはその場に立ち、右手を胸に当てる。
「プライマリーゲートの開放により《向こう側》に潜む大質量へのアクセスが可能となる。現在の我々は浅い海にしか潜れていない。その先に待つ、万物に変化し得る全く新しい資源を手にし目指すのは――」
このときばかりは荒くれたテロリストではなく、敬虔な宗教家の集団に見えた。
項垂れている狼頭も、巫山戯(ふざけ)ていたアリクイ頭も、厳かな雰囲気に従っている。
『腐敗した世界の破壊。我々は質量転送装置(トランスファー)によって新たな秩序をもたらす。《ゾアトロン》に栄光あれ』
「栄光あれ！」
「栄光あれ！」
「栄光あれぇっ！」

おまけ　Kカップ112センチパイ圧奉仕

市街地の戦闘でアリクイ頭の獣人に敗北し、あっという間に下卑た笑いに囲まれた。
マイアは立ち上がることができず、ひたすらシュガーに呼びかけてシステムの再起動を要請する。その通信ですらノイズ混じりになって聞こえなくなってきた。
「散々、手こずらせてくれたねぇ。アジトへ連れ帰る前にちょ～っとばかりお礼をしないと」
「ひぃっ!?　ほっぺたを舐めないでください!!」
「ふひひひっ、いい反応じゃないか」
「うぅッ……　チクチクして気持ち悪い……」
アリクイ頭の舌がチロチロと顔を這い、とてつもない嫌悪感に襲われる。蟻を捕食するための器官だけあって感触はざらついており、生々しい体温が肌に伝わってビクッと身体がのけ反った。
未だ回復せずにいると二の腕を掴まれて無理矢理、立たされる。獣人たちのいやらしい視線がマイアの肢体へと刺さった。
「じ、ジロジロ見ないでください……」
「はっ！　お高く止まってんなよ！　ムチムチのだらしねぇ身体を見せつけやがって！」
「そうだそうだ！　パワードスーツなのに、なんでハイレグなんだよ？　ヘソの形がわかるくら

いピッチリだし、横乳もはみ出てるじゃねーか！」
「それは……」
「恥ずかしがってるフリして、実は見せつけたいんじゃないの？　そんだけおっぱいデカいんだから自慢したいんでしょ」
　反論は余計に相手を調子に乗せてしまう。そう判断したマイアは固く目を瞑って顔を逸らした。しかし、アリクイ頭の舌が胸の谷間へと滑り込むと艶っぽい声が出てしまう。
「ひゃんっ♡　く、くすぐったいですぅ……」
「お、かわいい声を出すねぇ。じゃあ、これはどう？」
「んンっ♡　や、やめてくださいぃ……　舌先を乳首に巻き付けないでぇ♡」
　触られただけでしっかり勃ってしまった乳首が、変身スーツの下からクッキリと形を浮かび上がらせている。アリクイ頭の舌は薄布の上から乳首をコリコリ締め上げ、刺激を与えていた。
「あっ♡　あっ♡　ち、乳首ぃ……　つねっちゃダメですぅ♡」
「しっかり感じてるねぇ。とんだ淫乱娘だよ」
「違いますぅ……　んん♡　わたしはそんなんじゃ……　ンン♡　はぁ、はぁ……　おっぱいの先っぽが切ないですぅ♡　あ、あ、あぁ～♡」
　プシュ、プシュ……
　甘い喘ぎに混ざって、ハイレグレオタードの股間にシミが広がる。ツンとした香りを獣人たちが逃すわけもなく、細長い口端が吊り上がってせせら笑った。
「こいつ、乳首だけで絶頂しやがったぞ！」

「駄肉の塊みてぇな胸なのに感度抜群だなぁ！」
「はぁ♡　はぁ♡　うぅ……　言わないでくださいぃ……」
「ひとりで気持ちよくなるなんて、悪い子だねぇ。僕のも気持ち良くしておくれよ」
「えっ？　あっ……」
　舌を解かれ、へたり込むマイアの前でアリクイ頭は躊躇いなく陰茎を露出する。獣化の影響があるのか、以前に研究所でしゃぶることになったテロリストのものよりも遥かに大きい。呆気に取られたマイアがゴクリと喉を鳴らす。
　強烈な雄の臭いに充てられ、クンクンと獣人の逸物を嗅いでしまう。
（うっ……　鼻が曲がりそうです……　それなのに）
　自然と口角が持ち上がって、物欲しそうな妖しい笑顔になる。
　ゆっくりと口を開いてフェラチオに取りかかろうとすると……
「おっと。クチじゃなくて、胸でしてもらおうかなぁ」
「む、胸ですか？」
「知ってるよ。112センチのKカップなんだろ？　おっぱいで挟んで気持ち良くするんだ」
「そんなの……　やったことなくて……」
「無駄にデカいのにパイズリのやり方もわからないのかぁ。仕方ない、ボクが教えてあげるよ。もう痛い目に遭いたくないだろ？」
「許してください。そんなのしたことないです……」
「グダグダ言ってないで、さっさと始めようか。まずはチンポを唾液で濡らすんだ。おっと、胸

も丸出しにしてね」
「っ……」
逆らう気力も湧かず、言われるがまま胸元の布地をずらす。押さえつけられていたメロンサイズのバストが露出し、ブルンと揺れると歓声が湧き上がった。
「うはぁっ！　すげぇ生おっぱいだな！」
「キレイな乳首してるじゃねぇか」
「あー、もう。さっさと始めておくれよ。あぁ、ちゃんと心を込めてチンポに挨拶してからね」
「わ、わたしの……　大きなおっぱいで……　あ、あなたのお・お・おちんちんを……」
「声が小さいなぁ。もっとハッキリ喋ってよ」
「わたしのおっぱいで、あなたのおちんちんを気持ちよくさせて……もいいですか？」
「うーん、５０点くらい。ま、いいや。さっさと濡らして」
「はいぃ……　んぢゅ……」
ペニスに顔を近付け、先端に向けて唾液を垂す。
アリクイ頭は満足そうに目を細め「じゃあ、胸で挟んで」と促した。
「こうでしょうか？」
具体的なやり方は分からず、両手を使って胸の肉を左右から押し付けてみる。肉棒に触れた瞬間、とてつもない熱が伝わってきた。
（ひぃっ……!?　お、おっぱいで挟んだだけでビクンってしましたぁ……）
フェラチオの経験があるせいで射精の兆候は知っている。これはマイアの胸に反応しただけで、

果てる様子ではない。
「うはぁ、柔らかいねぇ！　じゃ、濡らしたチンポを擦ってみようか。左右のおっぱいで交互にやって」
「う、うぅ……　こんな街中で恥ずかしい……」
ずりゅ、ずりゅ、ずりゅ……
ペニスが胸の間を滑る生々しい水音が身体の中まで響いてくる。マイアの爆乳は、大きいと思った獣人の陰茎をすっぽり呑み込むほどのサイズだった。
交互に、リズミカルに乳肉を擦り付けて、滑りが悪くなると胸の谷間に唾液を垂らす。
「そうそう。いいよぉ、上手じゃない」
「ん、ん、んっ……」
「ちょっとテンポを変えてみようかぁ。両方のおっぱいを同時に持ち上げて、打ち付けるみたいにパイズリしてごらん」
「えっと、んっ……　えい！」
ずりゅりゅっ！　どんっ！
片側だけで5キログラム弱、両方なら10キロ近くあるマイアの乳圧が獣人の股間に振り下ろされる。これまで味わったことない柔らかさと重みに感嘆の声を上げた。
「おほっ！　す、すげぇっ！　この乳マンコ、ハンパねぇ！　危うくイクとこだったぁ！」
「おい！　さっさと変わってくれよ！　お前だけずるいぞ！」
「ははっ、ボスからこの作戦を任せてもらっているのは僕なんだ。君たちの出番はまだだよ」

またも獣人たちで揉めているが、マイアは懸命に奉仕を続けた。Kカップの乳を弾ませ、ネトネトと唾液を絡ませていく。全身が性感帯になったかの如く、チンポの温度を心地よく感じている。ジワッと濡れていただけの股間からは愛液がポトポトと

（はぁ、はぁ……　お、おかしいですぅ……　おっぱいで気持ちよくさせるはずが……　わたしまで気持ちよくなってきましたぁ……♡　たくましい獣チンポがぁ……　わたしをえっちな気分にさせていますぅ♡）

ズリュ、ドン、ズリュ……　乳肉を打ち付ける度にアリクイ頭も反応を見せる。細面が気持ちよさそうに宙を仰ぎ、内股に力を入れて射精を我慢していた。

そんな様子がマイアの心を動かしてしまう。

（あっ、この人……　わたしのおっぱいで気持ちよくなって我慢してるんですね……）

チロリと舌を出して唇を舐めた。

マイアはパイズリのペースを早め、緩急をさらに強くする。

「お、おい！　早い早い早い！　もっとゆっくり……」

「えいっ、ずりゅ、ずりゅ、チュ♡」

「いきなり先っぽにキスするなっ!?」

「うふふっ、き、気持ちいいですかぁ♡」

「くっ、この女……　調子に乗ってぇ……　おう!?」

「んぢゅ♡」

ずぶぶぶっ、ずりゅ♡　ずりゅ♡

咄嗟にパイズリとフェラチオの複合技を思いついたマイアは、エラの張った亀頭をすっぽりと呑み込む。竿の部分は乳に、先端は口で、器用に奉仕を続けた。
（ビクンビクンしてますぅ……♡　それにこの臭いと味……　もう少しでざ、ザーメンが……♡）
舌先のねっとりした苦味には覚えがある。溢れてきた先走り汁が口内に広がり、パイズリのペースはさらに早まった。
「お、お、お……」
「おいおい！　お前がリードされてどうするんだよ!?　早く俺と変われよ！」
仲間に笑われたアリクイ頭だったが、その言葉は耳に届いていない。とろんとした目はあらぬ方向を見ている。あまりにもマイアの乳圧が気持ちよく、精神が蕩けてしまったのである。
「い、イっちゃいますか？　そろそろイっちゃうんですねぇ♡」
最後は胸だけでフィニッシュさせようと懸命に擦る。鈴口までデカかった精子の臭いを嗅ぎ取り、アリクイ頭の脈動を皮膚で感じ取った。
「イクんですねぇ♡　お、お願いしますぅ♡　わたしに、た～っぷりと射精してくださぁい～♡」
「うっ……　で、出るぅ」
ビュ、ビュルるるるるっ……!!
マイアの乳圧に潰されたチンポからはザーメンが勢いよく吹き出し、マグマの如く爆発した。白濁汁が胸元から飛び出すと、その熱さで焼かれそうだった。
「熱いっ～♡　ざ、ザーメンがわたしの胸と顔にぃ……　ヤケドしちゃいそうですぅ♡」
びゅるるん、ビュルるるるっ!!

髪に、頬に、青臭い汁が降り注ぐとマイアは恍惚とした表情を浮かべた。自分の身体が男を射精に導いたという底知れぬ満足感が胸を満たす。

（ひぃっん♡　ザーメンっ♡　濃くてドロドロしてぇ♡）

指先で頬を拭って、そのまま精子を口の中へと運ぶ。「ちゅぱっ♡」と舐め取って嚥下した直後、マイアの胎内で凄まじい反応が起こる。背後から凄まじいエネルギーを感じ取り、一気に力が戻ったのである。つい先程まで立ち上がれないと思っていたのが嘘のようだった――

（体験版　ここまで）